

神戸海岸紀行

# 贅沢な 帯の世界

—海岸沿いの神戸を味合つて—

村松友視

撮影／緒方しげを  
松原卓也

神戸を海岸線に沿ってあるいてみる……これは、なかなかの世界だ。神戸の市街を右往左往したって贅沢な空間、異人館ありジャズありステーキありバーありだし、山沿いに移動するのもまた興趣をそそるというわけで、どうやったって素敵というのは困ったものだ。私は、いつの日かこの贅沢なベクトルの片隅に住んでやろうと目論んでおり、須磨あたりをそのターゲットと、心ひそかに決め込んでいる。そんなことを神戸っ子のKさんに話したことがあったが、今回の企画はそのせいかもしれないという気がした。

東へ少しはみ出した芦屋、西へ少しはみ出した明石をふくむ海岸線沿いの帯……神戸市という範囲からは、やや外側を組み込んだ観はあるものの、神戸センスの両手はそこまで伸びていっていいだらう。それに、街なかにいればとかくローアングルを決め込んで、やれ屋台だ蠅ノレンだ路地裏だと騒ぎがちな私の性癖というか病気も、ゆったりとした海沿いの世界があるけば、そのおだやかで落ちついた風景によって、軀の底へしばし沈み込んでくれるのではないかという気分もあった。

「カレーライス、どうですか」





海沿いの神戸、ここは須磨海岸

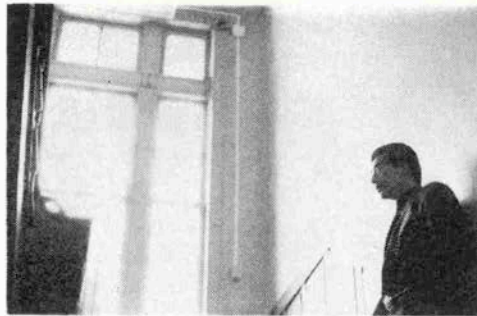
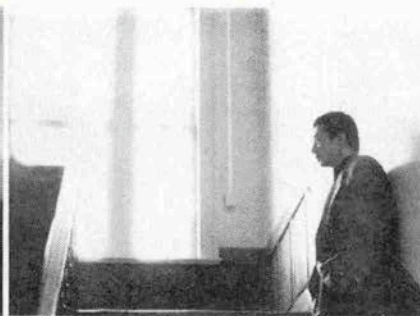
新神戸駅へ出迎えてくれたKさんが、私の顔を見るなりそう言った。いつものように、独特の薄いブルーのメガネの奥で、Kさんの元氣そうな目が笑っていた。

若くて根性のありそうな「カーブのN」と異名をとる女性編集者が、カーブを曲るときはうれしそうに、直線の道はつまらなそうに運転して、着いたところが「キングズ・アームズ」、ここもまあ海の近くかとはかり、私は今回の取材の物腰を確認した。「キングズ・アームズ」へ入って席へ着くと、「カーブのN」はメガネを外してたが、思いのほか柔らかな美型の顔があらわれて、取材の物腰からちょっと横ばいしかけたものの、気を取り直してカレーライスを食べ、さてという気合いで外へ出た。

旧居留地は、神戸三宮の南側にひろがる明治時代からのビジネス街だ。ここは、上海あたりのフランス租界やイギリス租界に似たイメージをもっていて、在日外国人の「出島」的意味合いで、百年以上



海岸ビルの重厚な階段をのぼる



も前に造成された地域だ。コロニアル・スタイルのビルに、神戸開港時代の息吹が残っているようだ。

その中のひとつである海岸ビルへ入ると、自分の靴音が急に古めかしくひびき、何ともいえぬノスタルジアが湧いてきて、天井の高い建物の中を心地よくあるき回った。

喫茶室へ向う途中、廊下に面して巨大な金庫の扉があったので、私は思わずダイヤルへ手をかけた。もちろん、外に表われている扉がたやすく開くはずもないが、こんな古色蒼然たる金庫の前へ立つと、かなり高級な怪盗紳士という役づくりが生じてくるのだ。

私はどうも、神戸へ来ると役者気分になってしまう癖がある。これは、フィクション感覚を満喫させる神戸という街のそのかしの結果だろうが、悪い気分ではない。

一階の道に面した明治屋は、これまた私好みのセンス、無骨さと大人っぽい気取りが一体となって成立していた。こんなところで、神戸っ子は悠然と昼食をとったりしているんだから……私は、うらめしげに明治屋の店内を一瞥し、かるく咳ばらいをして外へ出た。

あらためて海岸ビルを見上げると、建物自体が老紳士を思わせて、厳然たる中にもハイカラなイメージをただよわせていた。一陣の風が埃をからめてやってきたのを、心もとない身のこなしでよけて目を上げると、海岸ビルを思わせる老紳士が私の脇をすり抜けて、オリエンタル・ホテルの方角へあるいて行った。老紳士は、上衣のポケットへ突っ込んだ右腕が不自然に軀へはりついていて、戦争で腕を失ったのかな……私は、旧居留地界限によく似合う老人のたたずまいをしばらくながめていた。

上海の租界を思い浮かべつつ旧居留地をあとにして、第一突堤へとやって来た。この突堤は、戦前は大連航路に使用したとかで、現在も中国航路の優先岸壁となっていて、中国船の姿が目立った。

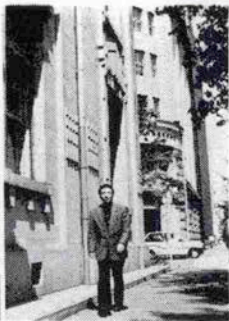
ここから上海までは何時間くらいかかったのだろうか……私は、そんな思い入れで沖を見やった。

私の父はかつて、上海毎日という新聞社へつとめて新婚早々に上海へ渡り、母もしばらくしてそれを追いかけた。その上海で母は私をみ





旧居留地の海岸通りをゆく



ごもったのだが、私が生れる前に父は腸チフスで世を去った。

そこで母は、おなかに私を宿したまま日本へ帰った。着いた港は長崎だったが、東京へ戻って私を生んだ。母は私を残して他家へ嫁ぎ、私は祖父母の息子として戸籍へ登録された。

やがて戦争が激しくなり、一家は強制疎開で清水へ行き、私はそこで高校三年生までを過ごした。そして祖父母の死、母との再会……てな顛末を追求してゆくと、ま、私小説めいた世界になるのだろう。だがここでは、「ワタクシ、上海仕込み、東京生れ、清水育ちのムラマツです」てなセリフで止めて、先へ進もう。

灘の生一本のふるさと灘五郷は、東から今津郷、西宮郷、魚崎郷、御影郷、西郷とあって全国の三分の一の生産量をほこっているとい



中国航路（第一突堤）戦前は大連航路だった

う。

阪神新在家駅南から大石駅にかけては、月桂冠、富久娘、忠勇などおなじみの銘柄の工場がある。小泉製麻のレンガ造りの工場の裏をぬう西国街道は、かねてから一度ゆっくりと歩いてみたいところだった。

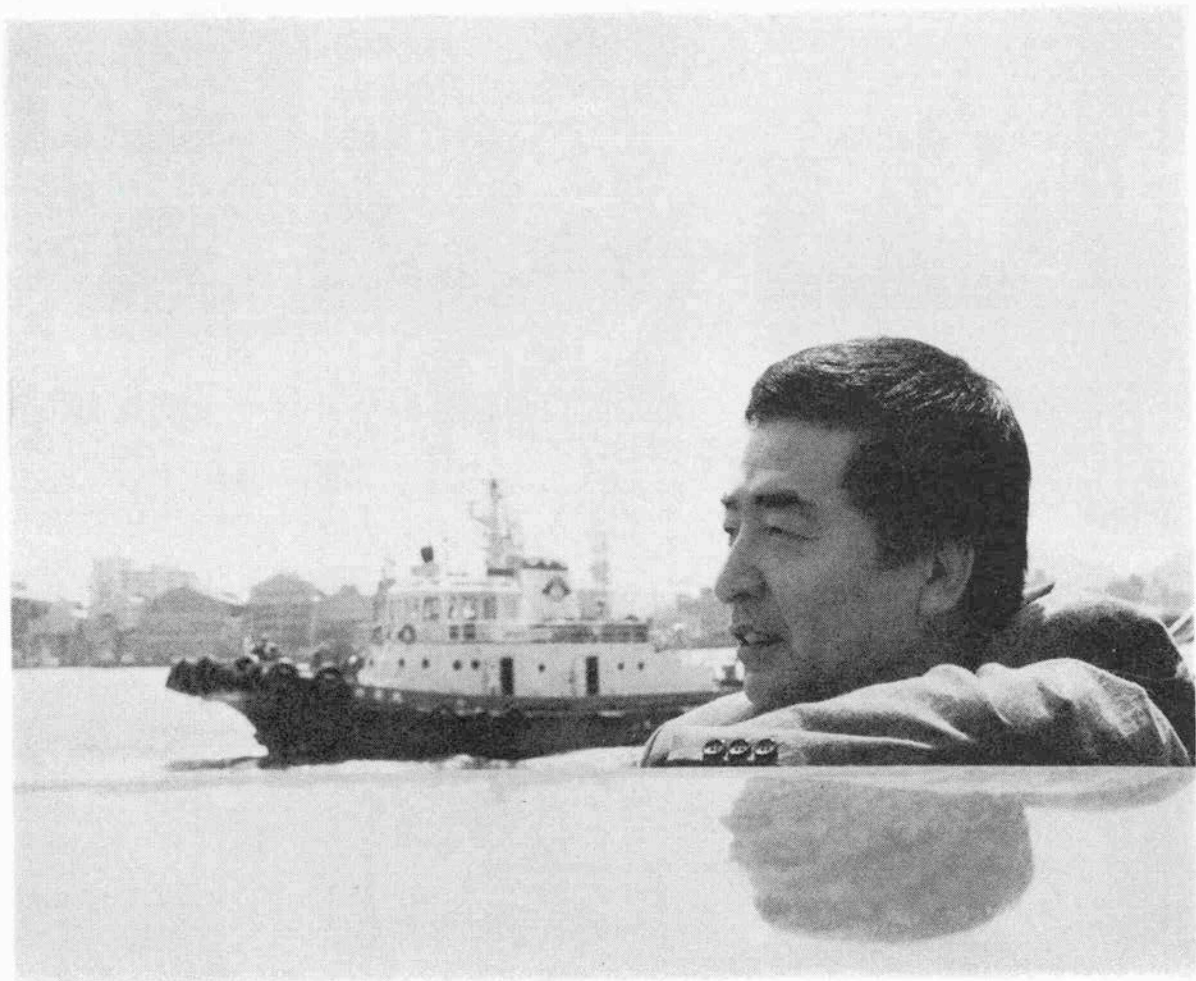
神戸市街の真南である旧居留地、第一突堤から、いきなり車を飛ばして西へやって来たのは、これを機会に酒の本拠をたずねようという、私の内面の希いとも呼応したコースどりだった。そして、沢の鶴資料館のすぐ近くにある、西北商店を訪れたのだが、これは思いもかけぬ収穫だった。

酒蔵でなく樽屋というところがミソだが、樽の世界は、まことに神秘の世界だった。すべてが手造りであり、倉庫もむかしのままの木造だ。職人の方々は休みだったが、ご主人の西北八島さんの要領のいい説明が、心地よく私をガイドしてくれた。工場見学ではないのだが、杉の木から樽が作られてゆく過程が神秘的だし、そのすべてが私などの知らないことなのだ。角樽だ四斗樽だと口走りながら、何も分っていないかった自分をかみしめたところであとの祭り、私はただ得をしたという感覚で、西北さんの話を聞いていた。

「杉の木ゆうのは、二色刷りでしてね……」

西北さんは、そう言って丸い杉の切断面を見せてくれた。二色刷り……というセリフが、樽屋のご主人にしてはちよいとばかり異なニュアンスをかもし出した。だが、これも神戸的センスのひとつかひとりで、私は丸い杉の断面をのぞき込んだ。なるほど、丸い断面の中心に近い半分ほどが赤味を帯び、その外側は白い木肌となっていた。そして、外側の白い部分で米櫃こめびなどを作り、内側の赤い部分では醤油樽や味噌樽を作るのだという。外側は水分を吸収せず、内側は水分を吸収しやすいという特徴のためだ。

では、眼目の酒樽はどの部分で作るかというならば、白と赤の境目が中心になっている。つまり、板の外側は白、内側は赤になる部分を使用するのだという。しかし、そのような律義な樽の作り方は、現在では御多分にもれず衰退し、そんな樽を注文してくる酒屋も激減した。だが、ここではあいかわらず本格的な作業をつづけているという



「ワタクシ、上海仕込み、東京生れ、清水育ちのムラマツです」





瀬（西北商店）から松並木の芦屋浜へ

が、需要の側のレベル・ダウンが、伝統工芸を風化させる現代の傾向が、すぐそこまできているという不安は、供給側でも感じ取っているはずだ。外側へ漆をはじめとする何かを塗っておけば……そういう屈託のない安易さが現代の風というやつだ。そう思うと、外が白く内が赤い酒樽の群れが、いかにもいとおしく見えてきたものだった。

酒樽を外側から締めつける籬<sup>かき</sup>だって、自然に結ぶかたちとなっていて、一本の針だって使用していない。その籬の呼び方にも、口輪、胴輪、中の輪などがあるって、樽のいちばん下のところに巻かれるのを「泣き輪」と呼ぶのだと説明された。それは、職人にとって泣きたくなるほどむずかしい仕事だという意味もあるようだ、西北さんは笑いながら言った。だから、職人は「泣き輪」にはかならず早朝の仕事はじめにかかり、目が疲れた午後にはやらないものだという。

際<sup>きわ</sup>と引<sup>ひ</sup>つけたイメージもあるが、「泣き輪」というのは面白い呼び方だ。

「そういえば、恋に泣き輪の井戸替<sup>いどか</sup>ゆうのがあったんちがう？」  
そこで、Kさんがワザを出した。さすが神戸の姐御、西鶴の『好色五人女』のひとり「樽屋おせん」を即座に思い出したのだった。  
「その、おせんですけどね……」

今度は、西北さんがいたずらっぽい目で、私とKさんを交互に見た。そして、両端につかむ所があり中央が彎曲した刃になっている、不思議な道具を持って来た。

「これは、荷を出す樽を作る杉を削るための昔からある道具なんです  
が、これを銃<sup>てう</sup>というんです」

「それで、樽屋おせん……」「まあね、そういうことやと」

「へえ、これは国文学者じゃ気づかないな」

「ま、樽屋の道具ですからねえ」

「こいつは、すごいこと聞いたなあ」

「それから、吉行淳之介さんの好色一代男の現代語訳、あれはムラマツさんが『海』にいたときですよ」

「ええ、ぼくが担当です」

「で、吉行さんも森銃三説について、いろいろと書かれてましたよね

え」

「ええ」

「でね、この道具の銚という字は、森銚三さんのなんですよ」

「あ、ほんとにそうだ……」

「森銚三さんの先祖が、樽屋だったって話も聞いたことありますね」

「しかし、ほんとかなあ」

「とにかく、樽屋おせんのは、この道具の銚さ」

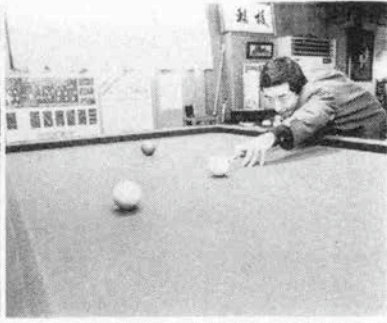
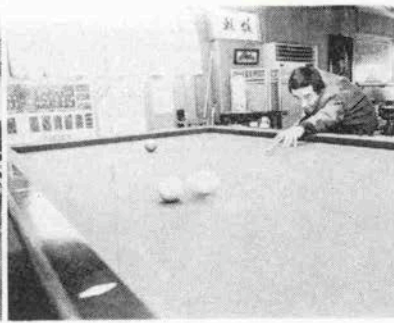
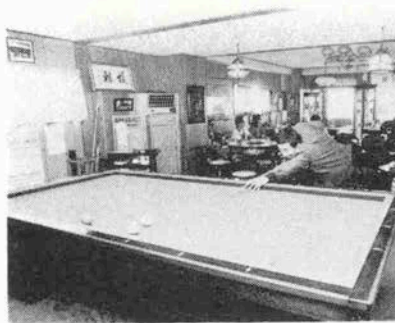
にかさねたんでしょうね」

私は、茫然としながら、吉行さんに聞かせるべき耳よりな話を、頭の中で整理していた。桶とか樽とか下駄は、今でこそ斜陽の一途をたどり、民芸品としてやっと生き残っているというものの、江戸の昔には庶民の日常生活における主役級だった。だから、銚に引っかけた「樽屋おせん」という洒落は、おそらくかなり通じるセンスだったろう。しかも、その字が森銚三の銚であるとい

樽職人が一番苦労する「銚」の泣き輪がここに（西北八島さん）







西北商店事務所の五階サロンにて玉を突く

うのは、ちよいと面白すぎるくらいだ。こっちが知らなくても、西鶴通ならば常識ということもあるし、油断はできないとばかり私は宙を睨んだ。そして、その目を西北さんにもどすと、

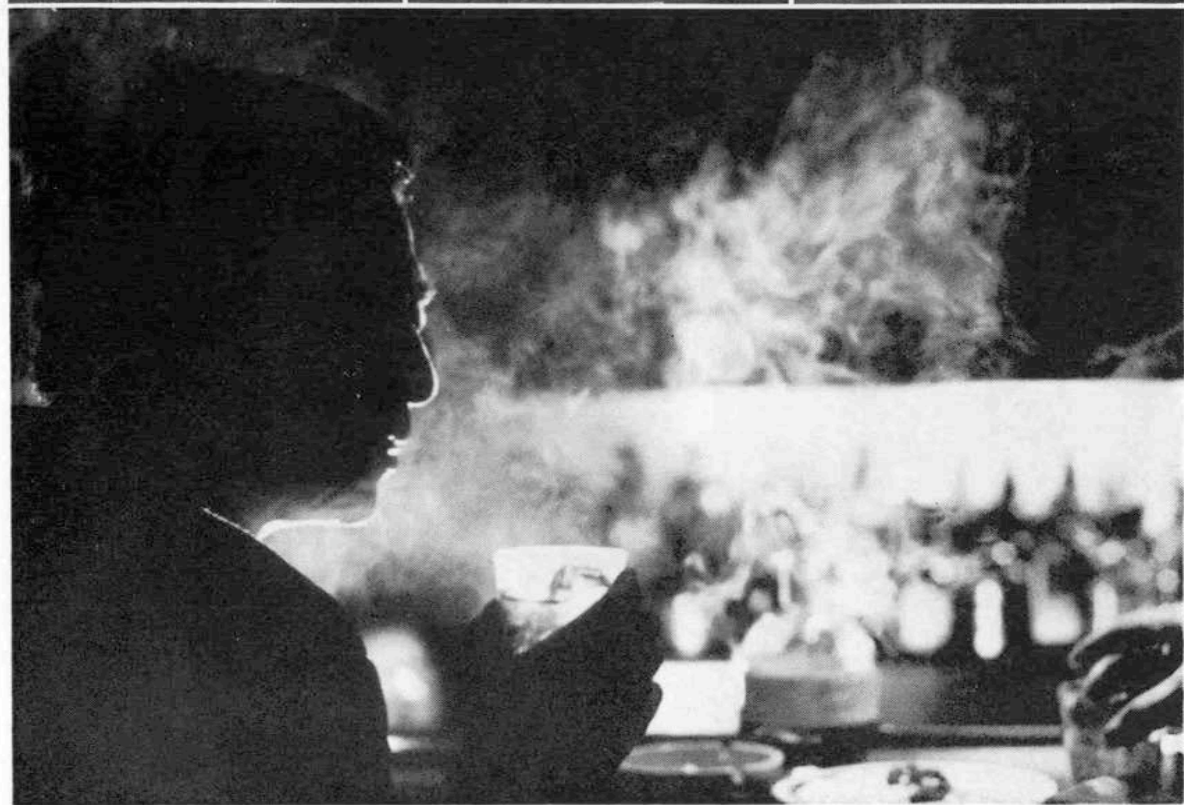
(待てよ……)

心の中で呟やいて腕を組んだ。「杉は二色刷り」という言い方にせよ、私が中央公論で文芸雑誌『海』の編集をしていて、そこに吉行淳之介訳の『好色一代男』が掲載されていたことを知っているというパイプにせよ、この西北さんという人物、ただの樽屋のご主人じゃあるめえという心持が生じてきたのだった。だが、帰りがけにその疑問は半分くらい解けた。

西北八島さんは美術家の加納光於さんの助手のごときことをやっていたことがあった。その加納光於さんは私も親しくて、かつて『海』の表紙として加納作品に一年ほど登場してもらったことがある。当時、加納さんは箱の中へ作品をおさめるような造形美術を手がけていて、その仕事の大工的部分を助手として手伝っていたのだと、西北さんは謙遜して言われた。だが、それにしても加納光於さんと縁をもつこと自体、ただの筋道ではあり得ないはずだ。まだまだ西北さんの謎は残ったものの、なぜかまだ二度や三度は会うような気もして、今回はこのあたりでという感じで辞した。それにしても「樽」という世界は、自分のあいだ私の頭に棲みつきそうだ。

そのあと、芦屋川沿いのテニス・コートあたりを少しあるき、六甲アイランドの橋を渡ったり、商船大やフェリーの船着場をながめたりして、ホテルへ向った。それにしても、Kさんが交叉点の真ん中で車を停めさせ、「えーとねえ、これを右やったかなあ、左やったかなあ」と思考していたのにはおどろいた。あれは、神戸風のおっとりしたイメージなのだろうか、それともやはりどこか変なのだろうか……。

オリエンタル・ホテルのバーでは、友人の能楽師・H氏が待っていた。友人……といっても、元はといえばKさんに紹介されたわけであり、どうしても神戸には頭が上らない仕組になっているらしい。旅先で店にボトルを置いて、それを縁にまた訪れるというまじないみたいになっている私は、オリエンタル・ホテルのバーにも、ブランドンとい



オリエンタルホテルのバーで友人と……



神戸を臨む明石海岸でMさんと、魚の棚で蛸と穴子を買う

うバーボンをキープしていた。これを、Kさん、カーブのNさん、能楽師のH氏、そして私でかくるく空け、もう一本ボトルをキープしてホテルを出た。そのあと、食事をして、バーへ行って、トランプ占いをする飲み屋へ行き、餃子を食べ、ジャズを聴き、オリエンタル・ホテルへ帰って眠った。

翌朝は、午前八時にホテルを出発、須磨の浦を打ちながめたあと、明石で地唄舞のMさんと落ち合った。Mさんは能楽師H氏のご夫人だが、この人が着物姿で交差点に立つと、にわかにそこが華やいて見える。

「あいかわらず、情ばっかりですわ」

Mさんは、つい二、三日前に「情」というテーマでの舞台をつとめたばかり、大盛況だったようで清々しい余韻を感じさせる表情だった。現実の街を急にフィクションに染めてしまうような、一種妖しい魅力のMさんが、手にパラソルを持って現われたから、グレイドの上った時代屋の女房に、作者の私がおどしているという、まことに情ない力関係となった。

明石浜や舞子浜、そして孫中山記念館のある移情閣あたりを、Mさんにつき合ってもらってあるいた。情を移すと書く移情閣と“情”を追い求めるMさんの組合せが、奇妙な放電を生んでいるようだった。次には、明石の市場「魚の棚」へ行き、鯛やら蛸やらあなごやら……清水育ちの私がよだれを流す凄味の世界を見物し、あなごと蛸を買って友だちへの土産にした。

最後は、すでに三度目の「菊水鮓」、創業明治三十年という仕事ぶりをながめながら、あなごの棹ずしをはじめとする極め付の味を堪能した。

さつき、移情閣からながめた淡路島の、意外なほど近い姿が、ゆっくりと私の目によみがえった。海沿いの帯状という世界は、またひとつ私を神戸を引きつける効果をもってしまった。

(困ったもんだな……)

私は、そう呟やいて、Mさんの帯のあたりで、しばらく目を泳がせていた。





# 河童が喋る

## 神戸と舞台



### 妹尾 河童さん

舞台美術家

1930年神戸生まれ。グラフィックデザイナー等をへて、1954年独学で舞台美術家としてデビュー。「紀伊国屋演劇賞」「サントリー音楽賞」「伊藤蕪湖賞」等受賞。舞台美術の第一人者であることはもちろん、エッセイストとしても有名。

神戸生まれで、舞台美術家の妹尾河童氏。現代日本を代表する舞台美術家として数々の賞を受賞されているが、「先生は固苦しいから、河童さんでいいよ」とおっしゃる気さくな人。講演のため、帰神された河童さんに舞台美術のことや神戸への思いをお聞きしました。（迎えの車の中で、さっそく）

40年前の看板が残っているそうですね。

よく知っているねえ。あつ、対談集を読んだのね。たぶん、まだ残っていると思うけど……。トアロードの洋服屋さんの切り抜き文字の看板なんだ。ぼく、旧制中学の神戸二中を卒業してすぐ、看板屋の小僧になって、トアロードのそばの『フェニックス』という看板屋で働いていたんですよ。そこは奥村隼人という画家がボスでね、昼間は看板屋だけど、夜になるとペンキの缶をかたずけてアトリエに早変わりしてた。モデルさんに来てもらってみんなで絵を描いていたんです。その時代だ。（中山手通り二丁目の『盛鴻洋服店』の前に立って）

照れ臭いなあ。十七歳のときに書いた看板と対面させるなんて。いま見ると稚拙な字だけど……。それにしても、よく残っているもんだなあ。40年も前のですよ。

（実は、店のご主人が、大事に補修してくださっていたのだ、と聞いた河童さんは、ひたすら感謝）

絵は小さいころからですか？

もともと好きでしたからね。五歳ぐらいの頃から、人

さまの家の壁に落書きをしてよく怒られていましたね。本格的に描くようになったのは、中学の3年生のときに、小磯良平先生が二中の卒業生で先輩だと知って、すぐ先生のお宅へ尋ねて行っただけです。子どもが「絵を見てください」といきなり玄関に現れたんだから、きつと驚かれたと思う。それから卒業するまでの間、よく先生の所へ行っていました。小磯先生からは、「よく見てごらん」と、いつも言われていた。いま考えると、形だけではなく、「ものの本質をよく見なさい」ということだったんだね。

——舞台美術家になられたのは？

まったくの偶然に近いんだ。大阪の『朝日会館』でグラフィックデザイナーをやっていたとき、ぼくが描いたポスターを見た藤原義江さんが、東京へ呼んでくれて、三年ほど居候をした。ところが或る日、いつも描いていた舞台美術家が急に降りたんで、「おまえ描いてみないか」と言われて仰天した。蔽から棒ですからね。ところが、「チャンスは蔽から棒に決まってるなあ！」って藤原ダンナに言われ、慌てて描いたんです。冷汗もಂಡしたがね。舞台美術の勉強をしていたわけじゃなし、まったくの我流ですから……。ところが、新聞やラジオで褒められ、次々と頼まれるようになって、気がついたときは舞台美術家。でもグラフィックやってたときよりも収入がダウンして、食うのに困りましたがね。それから

32年。いまでですか？ お蔭で食べてます。(笑)

——舞台美術家としての仕事のモットーは？

舞台美術というのは画家と違って、デザインの原画を人に渡して製作してもらうんです。つまり、設計図を描く建築家とか、オーケストラの楽譜を書く作曲家のような感じですね。だからぼくが何を表現したがつているのかを、的確に伝えなくちゃならない。自分ひとりで描く絵と違うところです。「カルメン」の舞台をデザインしたときは、壁の凸凹を10分の1に作って、その模型を持ち込んだりしましたね。相手は職人気質の人たちだから、若いころはよくケンカしてました。でも最近はこちらから積極的に協力してくれるようになったんで、楽になりました。ぼくも年とつたからなあ。若い頃と違って、今はうまくいってないときでも絶対に怒らないですね。それより、本番の幕があくまでの間に残り時間がどれくらいあるか？ どうやれば最短距離で直せるか？ を考えます。怒鳴るとね、怒られた人は腐ったり萎縮したりして、いい結果を生まないのでからね。どんな修羅場でも、冗談が言えるほど陽気にやるほうがいいんです。

——神戸という町への思いを聞かせて下さい。

さっき「陽気」って言ったけど、ぼくの気質はかなり神戸っ子的なものをもらっていると思う。舞台美術家になりはじめたころ、よく言われたんですよ。「そんなことは舞台のシキタリに反する」とか。するとぼくは、「すぐダメっていわないで、やってみようよ。なんでも最初は、だれもやっていないことだったんだから。飛行機だって、いきなり空を飛んだわけじゃない」ってね。神戸という街は、百年前は「兵庫村」で、大阪や京都に比べると伝統がない街ですね。その分だけ身軽だから、どんないろんなことを自由な発想でやってしまえる。山を削って島を作ったりする。プロジェクトも、神戸から生まれたと言える。だけど、もうそろそろハードだけじゃなく、ソフトの部分の文化を作り育てる年齢になっているんじゃないかなと思う。名古屋・京都・大阪には常打ちの劇場はあるけど、神戸にはないでしょう。新しいものはどんどん作れる街だけだね。それらを作るために、今までのものを壊すだけじゃなく、うまく残していくことも考える大人の街にならないとね。今壊しかけている「旧神戸商工会議所」だって遣してほしい建物だと思っていんだけど……建物のことだけではなく、これからは「神戸へ行ってきててごらん」と言えるような、「神戸発の文化」を生むようになって欲しいですね。パイタリテイのある街だから、期待してますが。

——最近出版された本が二冊ありましたね。「舞台の裏を見せて欲しい」という人が多いので舞台が出来あがる全貌をタネあかしをまじえて、裏側から案内しようと思って、『河童が語る舞台裏おもて』という本を出しました。それと、『河童が覗いた仕事師12人』という対談集。どちらも平凡社からです。読んでみてください。また神戸へ来たら、お会い

40年前の看板と対面（トアロード・盛鴻洋服店にて）

しまししょう。





暑さを忘れ六甲山上で味わう  
神戸の味とムード



六甲山上からの素晴らしい眺望と  
ムーンライト特選の料理をお楽しみ下さい。

7月18日(土)ー8月23日(日)

平日・4:00PM～9:00PM 土・日曜・正午～9:00PM  
(期間中無休)

※ビーフフォンデュ (神戸肉と山の幸)  
お1人様 7,000円(税・サ別)

- 他に一品料理もございます。
- 席数が限られていますので、ご予約をいただければ幸いです

## レストラン 六甲ムーンライト

灘区六甲山町西谷山六甲オリエンタルホテル西100m  
TEL 891-0497

ご予約 TEL 331-0886 (ムーンライト事務所)

四季おりおりの  
味と香りを懐石で...

馳走グループ

懐石 馳走

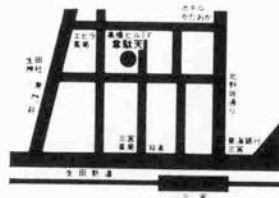
営業時間 AM12:00～PM 3:00  
PM 5:00～PM10:00  
神戸市中央区山本通4丁目26番  
TEL 078-222-6022



はもの季節を  
韋駄天で...

おでん割烹 韋駄天

営業時間 PM5:00～PM12:00  
神戸市中央区中山手通1丁目6-20  
(高橋ビル1階)  
TEL 332-3368・6129



大阪店もごひいきに...  
カウンター割烹「馳走」

大阪市北区曽根崎新地1・10・16  
永楽ビル1F  
TEL(06)34517343  
午後5時～午前2時



## ギャラリー あじさい

神戸市中央区三宮町1丁目8-1-305 サンブラザ3F

☎(078)331-1639・1067

(A.M.11:00~P.M.6:00)

7/21~7/26 中村百合子

神戸新聞連載 生活エッセイ原画展

## ギャラリー ビブレ

〒650 神戸市中央区三宮町1丁目5の26

三宮ビブレ21ビル7F

ビブレカルチャーセンター内

☎(078)331-6446(代) 331-7460

〈貸画廊使用規約〉 ●会期 / 6日単位(水曜~月曜)

●時間 / 午前11時~午後7時 ●使用料 / ¥150,000



—神戸元町・海文堂書店内—

## 海文堂ギャラリー

〒650 神戸市中央区元町通3-5-10

TEL (078)331-2467

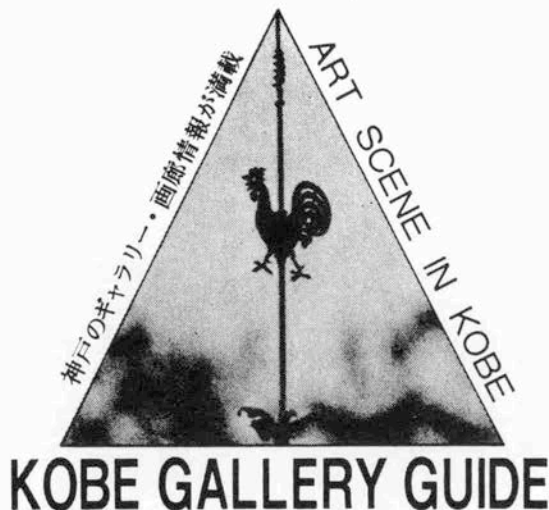
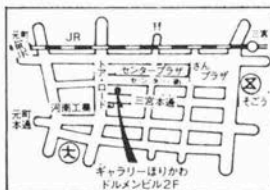
貸ギャラリーとしてご利用ください

## ギャラリー ほりかわ

神戸市中央区三宮町2丁目10-11  
(ドルメンビル2F)

TEL (078)331-2485(事務所)

332-4877(ギャラリー)



## KOBE GALLERY GUIDE

神戸ギャラリーガイド

## ザンバル 市民ギャラリー

〒651 神戸市中央区雲井通5丁目3-1 サンバル4階

TEL. (078)231-1166・2233

AM10:00~PM7:00(最終日PM5:00まで) 木曜日休館

### 〈サンバル市民ギャラリー〉

- 7月3日~7月8日 第11回六美会洋画展
- 7月10日~7月15日 '87はいび群像展
- 7月17日~7月22日 美術団体紹介シリーズ No.20 一陽会展
- 7月24日~7月29日 甲南・甲南女子中高写真部展
- 7月31日~8月5日 第5回手づくりの絵本展

### 〈サンバルminiギャラリー〉

- 7月3日~7月8日 さよなら「須磨水族館」展
- 7月10日~7月15日 '87はいび群像展
- 7月17日~7月22日 美術団体紹介シリーズ No.20 一陽会小品展
- 7月31日~8月5日 第5回手づくりの絵本展 おもちゃライブラリー